

第二節 敷設水雷ノ進歩

我國ニ於ケル敷設水雷創製前後ノ狀況ハ既記セルガ如シ而シテ明治二十年前後ニ於ケル採用及試験中ノ敷設水雷種類左ノ如シ

- 一、海底水雷及電路啓閉器附海底水雷
- 二、浮漂水雷及電路啓閉器附浮漂水雷
- 三、電氣觸發水雷

今之等ノ用途要目等ヲ略示セバ左ノ如シ

水雷種別	用途	發火法	要目、能力	記事
海底水雷	一、味方艦船ノ通路ヲ設定セザルベカラザル港灣ノ水路 二、潮流急激ノ場所 三、海水清澄ニシテ水面下少距離ニアル浮游物ヲ透視シ得ル場所 四、干満差甚大ニシテ觸發的水雷ノ敷設ニ適セザル場所	視發	(要目) 濕綿火藥五〇〇听、總重量一二一五听 浮量四二听、高サ一、一六米 外徑〇、八三米、罐厚六耗(鐵製) 錘量一〇「ハンドレットウエート」 (能力) 一、三〇呎ヲ離レテ鋼鐵艦ノ二重底ヲ破ルニ足ル 二、安全距離 三〇〇呎 三、最適深度 四八呎 四、毀害半徑 四三呎	一、電路啓閉器ヲ附シ視發觸發兩様ノ作用ヲ爲サシメ得 二、岩礁等ノ觸擦防止ノ爲海底ヨリ三呎ニ繫維スルヲ例トス
浮漂水雷	海底水雷ニ準ズ、但潮流過大ナル場所ニハ適セズ	視發	(要目) 濕綿火藥二五〇听、浮量三七四听、罐厚五耗 圓錐形 錘量一〇「ハンドレットウエート」	前記一ニ同ジ

而シテ當時之等各種水雷ニ對スル利害ニ關シ一般ニ認メラレツツアリシモノ左ノ如シ

電 氣 觸 發 水 雷	觸 發 場 所	觸 發	(要目) 濕綿火藥一〇〇听 大徑九三五耗、小徑三五八耗 高サ九四七耗 浮量五三五听 鍾電七「ハンドレツドウエート」	一、視發水雷ト同様衛所ヨリ 發火ヲ管制シ得
種 別	利	點	不	利
電 氣 觸 發	<p>(一) 沈積揚收共ニ危険ナシ</p> <p>(二) 敷設後ト雖機雷ノ如ク我艦船ノ航路ヲ絕對的ニ阻絶スルコトナシ</p> <p>(三) 濃霧ニ際スルモ又暗夜探照燈故障ヲ生ズルモ有効ナリ</p>			
視 發 水 雷	<p>(一) 我艦船ノ通路ヲ妨害スルコトナシ</p> <p>(二) 海底過深ニアラザレバ流潮強キ水路ニ用フルコトヲ得</p> <p>(三) 潮ノ干満大ナル水路ト雖使用スルコトヲ得</p> <p>(四) 使用電纜ハ若干隔縁ニ不良個所アルモ發火ニ支障ヲ與フルコトナシ</p> <p>(五) 假令敵艦觸衝セザルモ水雷ノ危險範圍ニアレバ奏効シ得ルヲ以テ少數水雷ヲ以テ防禦ノ確實ヲ期シ得ベシ</p> <p>(六) 海水透明ナルモ敵ニ發見セラルルコトナシ</p>		<p>(一) 水雷ノ位置確實ナラザレバ奏効必期シ難シ</p> <p>(二) 單衛所視發弧器ヲ使用セバ絶ヘズ標高ノ修正ヲ要ス</p> <p>(三) 濃霧暗夜等ノ際敵艦ノ照準不可能ナルトキハ無効ナリ</p> <p>(四) 衛所ハ照準ノ必要上敵前ニ露出スルヲ以テ堅固ナル防禦ヲ要ス</p> <p>(備考) 視發水雷中浮漂水雷ハ海底水雷ニ比シ水面ニ近ク敷置サルルガ故ニ裝藥量ヲ減ジ得ル利點アルモ敵ノ爲發見サレ易ク敵ノ妨害ヲ受ケ易シ</p>	
電 氣 觸 發			<p>(一) 我艦船ノ通路ニ敷設スルハ不可ナリ</p> <p>(二) 電纜ノ隔縁完全ヲ要ス</p> <p>(三) 流潮ノ過強水路ニ用フル能ハズ</p> <p>(四) 海水ノ透明ナル處ニ使用スル能ハズ</p>	

水
雷
得
(四) 衛所ハ敵前ニ露出スルコトナク充分安全位置ヲ選定シ

(四) 防禦ノ完全ヲ期スルニハ多數ノ水雷ヲ敷設スルヲ要ス

明治二十二年横須賀鎮守府ヲ中心トシテ水雷防禦ニ關スル演習行ハレシガ敷設水雷創設以來日尙淺ク大ニ改善研究ヲ要スルモノ尠ナカラズ別紙第一ハ當時ノ情勢及意圖ヲ示スモノナリ

如斯ニシテ二十七、八年戰役ヲ迎ヘシガ當時ハ佐世保、長崎港口、東京灣口、横須賀軍港ニ敷設水雷ヲ敷設セリ而シテ其ノ主用セシモノハ海底水雷、浮漂水雷及電氣觸發水雷ナリ

二十七、八年戰役後在英駐在武官ノ報告ニ依リ英佛其ノ他歐洲諸海軍國ニ於テハ球形水雷罐ヲ使用シツツアルヲ知り三十年二月軍令部長ハ大臣ニ商議スルニ球形水雷罐數個製造實驗方ヲ以テシ之ヲ製造ノ上翌三十一年夏季東京灣内ニ於テ二海里乃至二海里ノ潮流アル海中ニ球形、圓壻形各種水雷ヲ敷シ兩形ノ利害ヲ實驗セシ結果圓壻形水雷罐ハ其ノ浮漂水雷タルト電氣觸發水雷タルトヲ問ハズ又其ノ屬具ノ如何ニ論無ク大ニ潮流ノ爲其ノ効力ヲ殺ガレ其ノ極終ニ無効ニ歸スル虞アルモ球形水雷罐ハ其ノ屬具ヲ小ニセバ潮流ノ感動ヲ受クルコト少キヲ以テ深度位置共ニ有効狀態ヲ保持シ得ルコトヲ確メ得タリ尙球形ノ圓壻形ニ比シ甚大ノ利益アリト認メラレシ點ハ(一)浮量大ナルコト(二)罐ノ頑強ナルコト(三)耐壓力大ナルヲ以テ各水雷罐間ノ安全距離ヲ縮メ得ルガ故ニ水雷敷設ヲ密ナラシメ得(四)敵ノ反裝水雷ニ對シ殆ド二倍ノ強度アリ(五)隣邊發火水雷ニ對シ抗力大ナリ(六)潮流ノ抵抗小ナリ等ニ在リ唯當時

ノ工業力及技術上ヨリ製造工費嵩ミ且製造日數長キト取扱上ニ於テ幾分困難視セラレタル點アリシガ
而カモ之等ハ到底其ノ利點ヲ沒却スベカラザルヲ以テ將來圓壘形ヲ廢シ海底水雷ヲ除クノ外悉ク球形
トナシ尙現ニ使用中ニ係ル圓壘形罐ノ存在スル間ハ兩種併用ノ豫定ナルモ新ニ製造スルモノハ皆球形
ト爲シ漸次之ヲ支給スルノ計畫ヲ樹立セリ

明治三十三年前後ニ於ケル敷設水雷ハ殆ド二十年頃ニ於ケルト大差ナシ即チ左ノ如シ

一、綿火藥五〇〇斤海底水雷(圓壘形)

一、綿火藥五〇〇斤浮漂水雷(球形)

一、同二五〇斤浮漂水雷(圓壘形)

一、同二五〇斤電氣觸發水雷(球形及截頂圓錐形)

一、虛水雷

(備考) 虛水雷トハ我防禦部ノ裏端又ハ線外ニ撒布スル擬水雷ナリ參考ノ爲電氣機械水雷ヲモ併記セリ

明治三十六年前後ニ於ケル敷設水雷ノ現狀左ノ如シ

水雷種類	罐形	浮量	裝藥種類及量	
			綿火藥	下瀬火藥
海底水雷	圓壘形	五〇 <small>听</small>	五〇〇 <small>听</small>	二九四 <small>听</small> 六五三 <small>听</small>
浮漂水雷	球形	三〇〇		二八六 <small>听</small> 二六四 <small>听</small>
同	圓壘形	三七四	二五〇	二〇二 <small>听</small> 五〇〇 <small>听</small>

因ニ海底水雷ハ將來製造セラレズ又機械水雷ノ外各水雷ハ殆ド變化無ク有線水雷廢棄時(大正五年乃至七年)ニ及ベルモノナリ
 同年下瀬火藥裝填各種水雷ノ敷設距離ヲ左ノ通り定メタリ

各種水雷ノ敷設距離表 (三十六年六月
 內令第五十七號)

電氣觸發水雷	球形	四〇〇			一五八〇六 听研
同	截頂圓錐形	五三五	一〇〇		一二五八 听研
電氣機械水雷	球形	一〇〇			三一、九 听研
同	圓錐形		五〇		六三、一 听研

下瀬火藥裝填 水雷罐ノ種類	裝藥種	水雷ノ敷設距離(ヤード)					
		球形浮漂	球形觸發	球形機械	圓錐形海底	同浮漂	圓錐形觸發
球形浮漂水雷	二六二研	九〇	九〇	九〇	一一〇	一一〇	一一〇
同電氣觸發水雷	五九研	九〇	六〇	五〇	九〇	八〇	七〇
同電氣機械水雷	三一研	九〇	五〇	五〇	九〇	八〇	七〇
圓錐形海底水雷	二九四研	一一〇	九〇	九〇	一一〇	一一〇	一一〇
同浮漂水雷	二二五研	一一〇	八〇	八〇	一一〇	一一〇	一一〇
圓錐形電氣觸發水雷	五八研	一一〇	七〇	七〇	一一〇	一一〇	七〇
圓錐形電氣機械水雷	三一研	九〇	五〇	五〇	一一〇	一一〇	五〇

(備考)本表ノ一部ハ更ニ明治四十二年十月内令兵第二十七號ニ依リ改定セリ

三七一

斯クテ三十七、八年ヲ邀ヒ各軍港ニ水雷防禦ヲ實施スルトコロアリ茲ニ始メテ敷設水雷ノ價值ヲ大規模ニ實驗スルノ機會ヲ得タリシガ其ノ成績ハ豫期以上ニ良好ナリシモ唯戰勢常ニ我ニ有利ナリシ爲奏効ノ機會皆無ナリキ

之ヨリ先キ明治三十三年吳水雷團敷設部司令海軍少佐牧村孝三郎ハ沈底式浮揚水雷(俗稱牧村水雷)ノ考案ニ着手シ數年ニ亘ル實驗研究ヲ重ネ三十六年遂ニ本呼稱ノ下ニ兵器ニ採用スルニ至レリ從來我海軍各種兵器ハ當時ニ至ル迄ハ主トシテ英海軍等ヨリノ傳習模倣ニ過ギズ特ニ敷設水雷ニ於テ其ノ然ルヲ觀シガ本水雷ノ考案ハ蓋シ當時ノ我水雷界ニ一大衝動ヲ與フルニ足リシモノニシテ從來相當程度以上ノ水深及潮流ノ大ナル水道ニ在リテハ視發水雷ヲ以テスル防禦殆ド不可能ナリトシテ放棄セラレタルニ對シ一大光明ヲ與ヘタルモノナリ

一、本水雷考案ノ起原等

明治三十三年海軍大演習ニ先チ吳軍港防禦計畫ニ依ル水雷敷設線前進ノ議起リ實地踏査ニ着手シ吳水雷團長大久保々喜造以下ハ二神島附近及興居島水道ヲ巡視セルニ何レモ其ノ水道ノ廣狹丘陵ノ標高ハ當時ノ單衛所視發弧器ノ使用範圍ニ屬スルモ水道ニ於ケル水深及潮流ノ過大ナル爲到底現用浮漂水雷ニテハ不可能トセラレ同演習ニ於テハ止ムナク一步退キタル小柱島、黒島、横島線ニ選定シ奏効シタルモ元ヨリ所望ノ位置ニアラズ更ニ出來得、ベクンバ一步ヲ進メテ從來絶望視セラレタル豊後水道線ヲ選ムベシトノ說現ハレタリ之ヨリ先キ歐洲ニ於テハ沈底式(「トルマント」式)水雷ナルモノ有効視セラレツアルヲ知り之ニ

依り或ハ成功スベキヤノ論據アリシヲ以テ之ガ研究ノ胸算ヲ樹テ大演習後ノ好季節ヲ選ミ之ガ實驗ニ着手スベク一決セルモノナリ

斯クテ興居島水道及豊後水道等ニ於テ實驗ノ結果概ネ左記能力ヲ具備スルモノヲ得タリ

(一) 作 働 相當確實

- (a) 發火ヨリ爆發狀態 潮流ヲ考慮ニ入レザレバ七十尋海深ニテ約五〇秒、爆發深度七尋、浮揚速力一尋〇、八一二秒
- (b) 浮揚位置 表面潮流二節ノ時水深六十一尋、爆發深度七尋、偏位五十六碼、流速ノ上下異ルガ如キ場合ハ偏位

ニ就キ相當考慮ヲ要ス

之レ即チ少佐牧村孝三郎ノ考案計畫ニ係ルモノナリ

二、要目及機構概要(兵器ニ採用時三十六年ニ於ケルモノ)

本水雷ハ球形浮漂水雷罐ヲ使用シ左記主要部ヨリ成ル

- (一) 球形水雷罐、但シ包筒ヲ有セズ (二) 牧村水雷底蓋 (三) 水壓電路啓閉器機 (四) 斷電器「カーム」附加抵抗共 (五) 乾電池及電池筒 (六) 安式電驛器 (七) 爆發繫維器 (八) 牧村水雷電鑰 (九) 沈置機甲、乙 (十) 特用同螺器
- 裝藥量ハ下瀨二七二、一五斤トス

三、發火法及作働要領

- (一) 豫メ流潮方向、速力、水深、水雷浮揚秒時(但シ流潮ニヨル水雷繫維索ノ傾斜ヲ加味ス)ヲ測定シ置キ (二) 敵出現セバ其ノ針路速力ヲ測リ (三) 水雷ノ浮揚秒時ニ對スル敵ノ進行距離ヲ測リ敵ガ水雷位置ヨリ其ノ距離ニ來リシ時電鑰ノ發火栓ヲ挿セバ水雷罐ト錘量トヲ結合スル爆發繫維器ヲ發火シ水雷浮揚シ來リ敵艦底下(危害半徑内)ニ爆發ス

斯ル間ニ三十七、八年戰役勃發スルヤ作戰ノ發展ニ伴ヒ益々津輕海峽ノ警戒ヲ嚴ニセザルベカラザルモノアリシニ拘ハラズ少數ノ警備艦艇ヲ以テハ遂行不可能ナルヲ以テ軍令部長ハ別ニ固定防禦ヲ以テ

全く同海峽ヲ杜絶スルノ良法アルベキヲ思考シ三十七年十月大臣ト協議ノ上特ニ牧村水雷五十個ヲ準備シ横須賀鎮守府司令長官ノ指揮下ニ實驗セシメタリ斯クテ調査委員ハ幾多ノ障礙ヲ排シ二回ノ沈置實驗調査ヲ重ネタル結果三十八年十一月左記斷案ヲ具シ其ノ顛末ヲ報告セリ

津輕海峽水雷防禦調査終結斷案

津輕海峽ニ於ケル天候潮流水深及敷設作業等ヨリ推究スルトキハ同海峽ニハ牧村水雷ヲ敷設シ得ル位置アリト雖其ノ水雷ノ位置ハ到底沈置ノ爲之ヲ圖上ニ計畫指定スルヲ得ズシテ防禦材料ノ豊富ナル供給ヲ要シ尙敷設及揚收ニ要スル日數ハ其ノ時季ニヨリ數日ニシテ遂行シ得ルコトアリ或ハ數月ニ亘ルモ若干ノ望ナキコトアリ又敷設後敵艦通航ニ當リテモ或ハ展望不良ニシテ有効狀態ニアル水雷モ遂ニ使用ノ途ナキコトアリ以上ヲ概括スルトキハ多數ノ材料ト非常ノ努力ト且多數ノ日時トヲ以テシテ其ノ得ルトコロノ結果ハ頗ル微々タルモノナリ即チ名ハ或ハ副防ト稱セムモ實ハ鞍山子ノニ政略的ニ使用スルニ止リ其ノ効力ニ至リテハ全然期待シ得ザルガ如シ尙假令政略的ニ使用シ得ベシトスルモ牧村式水雷ノ繁雜裝置等尙二、三點ノ攻究改良セザルベカラザルモノアルヲ以テ直ニ津輕海峽ノ如キ強潮流ノ間斷ナキ水路ニハ使用未ダ適切ナラズ

右ノ外當局ニ於テ從來屢次提出セラレタル報告ヲ綜合考究スルニ該調査事業ハ着手以來未ダ適否ヲ判決スベキ域ニ達セズト雖本調査ヲ完全ナラシメムトセバ所要設備ヲ増大シ更ニ大規模ノ實驗ニ着手セザルベカラズ而シテ其ノ成功如何ハ疑無キ能ハズ由テ他日更ニ適當ノ地域ヲ選定シテ本水雷使用範圍等ヲ研究セシムルコトトシ三十八年十一月一ト先ヅ本調査ヲ終結セシム

因ニ記ス本水雷ハ大正四年四月左記理由ニ依リ兵器ヨリ削除セラレタリ

牧村水雷ハ採用以來實用ニ供セラレタル機會無ク又將來ニ於テモ尙多クノ改良ヲ加ヘザレバ今後使用ノ見込無ク從來該水雷ノ改

真型ニ就キ實驗調査ヲ重ネタルモ満足ノ兵器ヲ得ル能ハザル狀況ニ在リ依テ此際兵器ヨリ削除スルヲ至當ト認ムルニ依ル

前記牧村水雷ノ採用ト相前後シ類似ノ考案ニ就ルモノ若干出現セリ其ノ主要ナルモノ左ノ如シ

一、山根式沈底浮揚式水雷

本水雷ハ三十七年海軍少佐山根米吉ノ考案ニ係リ三十八年二月訓令ニ依リ津輕海峽防禦調査ノ際ニ於ケル實驗ノ結果ニ鑑ミ更ニ其ノ一部ヲ改良シ三十九年十二月十六個ヲ新製ノ上各四個宛ヲ横須賀、吳、竹敷、大湊敷設隊ニ供給シ主トシテ

- (一) 取扱ノ便否、敷設ノ難易、浮揚發火ノ確否其ノ他敷設水雷トシテノ諸性能ノ檢視
- (二) 六箇月以上潮流アル深海面ニ敷設シ繋維狀況、水防故障ノ狀況

等ノ實驗ヲ爲サシメシガ作働所期ノ如クナラズ遂ニ四十一年四月二十五日ヲ以テ一ト先ヅ本實驗ヲ中止シ單ニ其ノ考案改良ノ爲積須賀海軍工廠ニ寄託スルコトトシ大正四年ニ及ビシモノニシテ其ノ後半ニ於テハ寧ロ一種ノ沈底式機械水雷トシテ研究セラレシモノナリ(大正四年廢棄ス)

本水雷ノ構成要旨及作働要領左ノ如シ

- (一) 水雷罐ハ水雷浮漂ノ狀態ニ在ルトキ潮流側壓ニ對スル傾斜沈降ヲ可成滅殺セン爲浮量ヲ増大セシムル目的ト且從來供用ノ機械水雷ヨリモ裝藥量ヲ増大セシムル目的ヲ以テ當時ノ最大浮漂水雷罐ヲ使用シ該裝藥ノ三分ノ一ヲ除キ裝藥四〇〇听ヲ餘シ浮量ヲシテ約五〇〇听ノモノタラシム
- (二) 電池力ヲ永久ニ持續セシムル爲角式釀成電池四個ヲ水雷罐ノ頭部ニ植付ク
- (三) 沈置及揚收ニ於ケル絶對的安全裝置トシテ活動「スイッチ」ヲ木框上部ニ取付ク
- (四) 沈置時ノ重復安全裝置トシテ又浮流時ノ同裝置トシテ沈底式浮揚水雷用水壓電路繋維器ヲ裝填口ノ蓋ニ附着スルコト沈底式浮揚水雷ニ同ジ
- (五) 水雷試驗用トシテ有極電驛器一個ヲ罐内ニ裝入ス

二、海底連繫水雷

三七五

三十九年海軍中尉堀内宗平ノ考察ニ係ルモノニシテ用途ハ牧村水雷ニ同ジ本水雷ハ其ノ構造ノ大部ハ連繫水雷ニ同ジキモ浮標ハ特別ノ装置ヲ設ケ牧村水雷ノ爆發繫維器ヲ用ヒ常ニ水雷ヲ深キ海底ニ繫維シ必要ニ應ジ水面ニ浮揚セシメ敵ヲ爆沈スルニ在リ而シテ四個ノ水雷ヲ連繫シ敵ガ水雷ニ觸レザレバ爆發セザルヲ牧村水雷ニ比シ異ル點ナリトス本考察ハ實驗ニ至ラズシテ止メタリ

斯ノ如クニシテ爾後此種水雷ニ就テハ大ナル進展無ク大正ニ及ビシガ當時ヨリ敷設水雷中ノ管制水雷廢止論漸次有力トナリ特ニ世界大戰開始後一般機雷ノ有力ナルヲ見聞シ一層其ノ聲ヲ高メ之等ノ一部ハ別紙第二(中將川島令次郎)ノ如ク反對論者(敷設水雷存續)ノ意見ノ一例ハ別紙第三(海軍少佐山路一善)ノ如クナリシガ大正三年八月創設ノ水雷改良調査委員會ニ於ケル一般的考察ハ主トシテ實行上ノ見地ニ基キ概ネ敷設水雷存續論ニ在リシヲ見ル

尙同時ニ當局ニ於テモ機械水雷ノ發達ト其ノ聲價ノ向上ニ連レ屢々敷設水雷ノ訓練ヲ忽緒ニ附スベカラザルヲ訓諭スルトコロアリシガ大勢ハ遂ニ如何トモスベキナク大正四年三月有線水雷及附屬具整理ノ目的ヲ以テ有線水雷改廢供給方針ヲ左ノ通定メタリ

一、球形電氣觸發水雷

時機ヲ見テ甲種機械水雷ニ改造ス

二、圓球形電氣觸發水雷及同浮漂水雷、露式水雷

削除又ハ消耗品トス

三、球形浮漂水雷、海底水雷

現存ス

四、倍心裝錠電纜

倍心電纜節約裝置ノ採用ニ依リ漸次之ヲ廢ス

五、交線弧器及同用視發弧器

削除ス

次デ大正五年九月在庫舊式敷設水雷處分方ニ關シ左ノ通定メタリ

一、海底水雷及圓壘形浮漂水雷罐全部ヲ廢品處分ス

二、球形觸發及浮漂水雷(圓錐形共)ハ其ノ儘兵器庫ニ保管シ其ノ他ハ年度消耗用トシテ處分ス

(備考)大正五年ヨリ同七年ニ亘リ防禦計畫ノ變更アリ新兵器(機雷)ノ充當上有線水雷ノ一部ハ大正七年迄使用セラレタル局地ア

リタリ

別紙第一

水雷ニ關スル意見

(明治二十二年海軍大演習ニ關スル意見ノ一部) 摘要

明治二十二年五月

海軍大尉 坂本 俊 篤

一、大小數種ノ海底水雷ヲ作ルベシ

水雷ニ海底、浮漂ノ二種アルハ即チ特異ノ場所ニ應用スルガ爲ナリ又海底水雷中ニ量ノ大小アルハ水ニ深淺アルチ以テナリ我國ニ海底水雷アルモ同一種ニシテ大小アルコトナシ深淺不定ノ海底ニ遭遇スルトキハ五百斤ニテ不足ナルモ五百斤以上ノ水雷ナク五百斤ニテハ過大トスル深サアルモ五百斤以下ノ海底水雷ナキハ不便大ナリ佛國海軍ノ如キ各異ノ深淺ニ應用スルガ爲制定セル海底水雷ノ大小ヲ左ノ如ク類別セリ

(一) 七百「キロ」綿火藥

二十二米ヨリ二十四米ノ海深ニ用フ

(二) 六百「キロ」同

二十米ヨリ二十二米ノ海深

(三) 五百「キロ」

(四) 四百「キロ」

(五) 三百「キロ」

(六) 二百五十「キロ」

八米ヨリ十一米ノ海深

要スルニ浮漂水雷ヲ以テ海底水雷ニ代用シ得ザル以上海底水雷ニ大小量ヲ異ニスルモノ無カルベカラズ
二、浮漂水雷ニ視發法ヲ用フルヲ不可トス

海底水雷ハ其ノ位置海底ニ在リ確乎不動ナルガ故ニ視發法ヲ用ヒテ先ヅ誤リ無カルベシト雖浮漂水雷ハ其ノ性質上潮流ニ從ツ
テ多少其ノ位置ヲ變換セザルヲ得ズ即チ視發法ハ頼ムニ足ラズト云ハズシテ視發法ハ之ヲ用フル能ハズト云ハントス
三、現用衛所用方位盤ノ缺點ハ之ヲ除去改善スベシ

現用弧器ハ敵艦ガ水雷沈置ノ一點上ニ來ルトキノミ發火シ得ルノ裝置ニシテ其ノ一點ヲ少許ニテモ距ツルニ當リテハ發火シ得
ザルモノナリ然ルニ水雷ノ發火機會ハ一點上ニ留ルモノニアラズ其ノ危害半徑ノ圈内ニ在ルモノハ盡ク之ヲ發火スルモ有効ノ
モノトス即チ之ヲ數理的ニ觀察セバ現用弧器ハ水雷發火ノ機會ヲ狭少シテ十八分ノ一ニ至ラシメタルニ齊シト云フベシ改善ヲ
要スル所以ナリ

四、啓閉器ノ缺點ヲ改善スベシ

啓閉器ハ水雷ノ發、不發ニ係ル要器タルヲ以テ之ヲ附着セル水雷ハ沈下前啓閉器ヲ活動セシメ之ガ導通隔縁ノ試驗ヲ經ザルベ
カラズ(假令別ニ啓閉器ノミノ活動ヲ試ムルノ法アリト雖之ヲ水雷ニ裝備セル上ニテ其ノ全體ノ活動ヲ試ミザレバ安ンズル能
ハズ)然ルニ現用啓閉器ノ如キ船舶ノ如キ重大物ノ觸衝ニ會ハザレバ此活動ヲ見ルコト能ハザルモノタリ
五、水雷ハ海底沈下ニ先チ導通試驗ヲ爲スベシ

現ニ之ヲ危險視シ行ハザルヲ例トスルガ如シ斯ル自信無キ準備ハ歎ズルニ餘リアリ佛國海軍ノ如キハ必ズ之ヲ實施シツツアリ
研究ヲ要ス

六、水雷罐ノ堅實ヲ増シ水雷敷設間隔ノ減小ヲ圖ルベシ(後略)

別紙第二

大正二年十一月二十五日

海軍大臣 男爵 齋藤實殿
海軍中將 川島令次郎

近時海軍兵器中魚雷ノ偉大ナル改良ヲ見其ノ勢力ノ増加ト潜水艦及飛行機ノ採用殊ニ日進月歩ノ發展ハ海軍兵衛上一部ノ變更ヲ來シ居ルハ今新ニ叙述ノ要ナキ處ニシテ計畫實施常ニ遺漏無キ我海軍中央部ニ於テ之ニ對スル施設亦最モ適切ナルモノアルハ小官ノ確認スル處ナルモ一方新兵器ノ採用ト共ニ舊時用ヒ慣レタル戰法ト之ニ伴フ兵器ノ存廢ニ就テハ又大ニ論議ノアルベキヲ思ヒ國家軍費多端ノ今日其ノ經營調節ニ就テハ素ヨリ切實ナル審議周到ナルハ毫モ疑ヲ存セザル處ニシテ職務以外ノ事項ニ對シ妄ニ卑見ヲ陳述スルハ僭越ノ嫌ヲ免ガレズ尙本件ニ對シテハ已ニ詮議進行中カトモ存候得共一片ノ微衷此際御英斷アルコトノ軍國ニ鴻益アルベキヲ確信シ迂愚ヲ願ミズ所見ヲ上申スルコト左ノ如シ

主旨

一、布設水雷ハ機雷ヲ除ク外之ヲ廢止スルコト

但シ先ヅ各軍港防禦用ノモノヲ廢シ(舞鶴及旅順ニ就テハ別ニ詮議アルノ主義トス)要港防禦ニハ當分之ヲ殘置スルノ制トシ又戰時編制ノ計畫ニ從ヒ前進根據防禦用ノモノヲ存置ス

理由

一、魚雷進歩ノ今日ハ我レニ防禦ノ任ヲ帯ビタル水雷隊(驅逐隊、艇隊、潜水隊)ノ備アラバ敵艦隊ノ港灣口附近出沒ヲ防止スル

ハ敢テ至難ノ業ニアラズシテ更ニ機ヲ見テ撃破ヲ行フコトモ其ノ算アル處トス尙再言セバ潜水艇及魚雷進歩ノ今日敵艦隊ガ現時敷設水雷ヲ使用シアルガ如キ海面ニ侵入シ來ルコトハ稀有ノ事ニシテ若シ之ヲ敢行スルニ於テハ我ハ好餌トシテ水雷隊ヲ以テ之ヲ撃破シ終ランノミ加フルニ飛行機ノ偵察力ヲ以テスハ敵ニ於テモ之ヲ用フベキモ陸上確實ナル據點ヨリスル規則正シキ偵察法ニ則リ用ヒラルルモノ遙ニ有利ト認ム)警戒ノ密以テ期スベキ處ナリ

二、飛行機ニ依ル空上ヨリノ偵察機能ヲ得ラレタル今日防禦配備固定ノ不利ハ從來ニ數倍スルトコロニシテ殊ニ水中透視力ヲ用ヒラルルトキハ敵ノ爲水雷敷設位置ヲ偵知セラルルノ公算一層ヲ加フ是亦敷設水雷ニ依ル防禦法ノ價值ヲ減ゼルコト大ナリ

三、飛行機及潜水艇増備ノコト目下ノ一急務タルハ敢テ言フヲ要セザル處ニシテ同シク防禦ノ配置ニ充ツルトスルモ固定性ナル敷設水雷ノ實ヲ轉ジテ移動性ナル前記新兵器ノ其ノ他ノ充實ニ充ツ其ノ利自ラ明カナリトス

四、更ニ國防全般ノ上ヨリ見ルニ我ニ於テ海戰部隊タル相當海上勢力ノ維持アル以上敵艦隊ガ輕々シク我防禦港口ニ進ヅキ來ルコトハ彼ニ於テ最モ不利益ノ行動ニシテ若シ之ヲ敢テスルニ於テハ我ハ其ノ機ニ投ジテ大ニ敵ノ勢力ヲ減殺スルノ手段アルベシ萬一事ノ始メヨリ彼我對勢非常ノ懸隔アルカ或ハ海戰ノ結果彼我勢力ニ大ナル差違ヲ來シ敵ニシテ港口侵入ヲ企ツル迄ノ餘裕ヲ見ルニ至ラシムレバ港灣ハ固ヨリ我國防ノ破綻ニシテ此時ハ敷設水雷ノ有無ノ如キ問題ニアラザルナリ

五、過ケルニ大戦役ハ素ヨリ從來行ハレタル大規模ノ演習ニ於テモ特ニ演習構成ニヨリ誘導セラレタルモノノ外大艦ノ敷設水雷(機雷ヲ除ク)ニ觸レタルモノナキモ亦該水雷ノ價值ヲ斷ズルノ一資料タルベシ

終

別紙第三

海軍大佐 山路 一善 (軍令部 第二班長)

敷設水雷存廢ニ對スル本意見ハ理想トシテハ首肯シ得ルモ帝國現下ノ狀態ニ鑑ムルトキハ非常ニ突飛ナル議論ニシテ未ダ採用ノ時機ニ達セズト認ム、理由左ノ通(摘録)

一、今日軍港要港等ノ防禦ハ潜水艇隊及驅逐隊艇隊等ニ托スルヲ有利トスベキハ明カナルモ所要隻數ヲ得ルニハ軍國ノ經費之ヲ許サズ

(註)敷設水雷電纜ノ保存及補充ニ要スル經費ハ合計毎年約二十餘萬圓ニテ足ル故ニ此費用ヲ積ムコト十年ナルモ漸ク七百圓トノ潜水艇一隻ヲ建造シ得ルニ過ギズ

二、想定敵國ト其ノ海上部隊ノ勢力ニ大ナル差違アル我現狀ニ於テハ敷設水雷ノ防禦ハ該地方ニ對シテ無限ノ慰安トナリ又我出征艦隊ヲシテ後顧ノ患無カラシムルコトヲ得ベシ

三、陸上要塞ハ其ノ威力未ダ軍港要港ノ絶對的防禦トシテ信賴スル域ニ達セズ

四、機械水雷ハ一度之ヲ沈置セバ味方艦船ノ通路ヲ全ク杜絶スルノミナラズ之ガ揚收不可能ナリ故ニ未ダ有線式水雷ニ代用セシムルノ時機ニ達セズ

五、飛行機上ヨリ敵ノ攻撃ニ對シ安全ナル飛行高度ヲ維持シ水面下約四〇呎附近ニアル水雷罐ヲ發見スルガ如キハ目下ノ程度ニテハ殆ド不可能ナリト斷言シ得ベシ

六、有線式水雷ハ佛國ハ之ヲ廢セシガ如キモ其ノ他ニ於テハ未ダ其ノ廢止ヲ聞カズ

要之有線式水雷ヲ以テスル防禦ハ最モ安價ナル防禦法ニシテ戰勢ニ應ジ其ノ有形無形ノ効力偉大ナルモノナルヲ以テ前記ノ如ク我局地防禦用トシテ相當ノ潜水艇並ニ驅逐艦若クハ揚收容易ナル機雷ヲ具備スル迄ハ未ダ廢止ノ時機ニ達セズト認ム

(終)